

IV-42 コミュニティ施設の整備における住民参加の実態とその比較分析

徳島大学大学院 学生員 中村泰基
 徳島大学工学部 正会員 山中英生
 徳島大学工学部 正会員 山口行一
 建設材料試験所 正会員 澤田俊明

1. はじめに

市民の参加意識の高まりから、公共施設の計画、建設、運営に対して住民参加の導入の必要性が高まってきている。1997年度に完成した「しらさぎドーム」は徳島市では、初めてコミュニティ施設に対してワークショップ手法による住民参加が取り入れられた。そこで、「しらさぎドーム」でのワークショップ導入効果を住民の視点から他のコミュニティセンターの事例と比較し評価することを目的としている。ここで、コミュニティセンターとは、「特定の地域住民が自主的に運営または使用する日常生活の施設で町内の寄り合いなどの会合や研修、各種講習会やサークルなどのできる集会所を主な構成要素とする建物」である。

2. 調査概要

表1に示す4カ所のコミュニティセンターとしらさぎドームの地区住民に対してアンケートを実施した。

表1 調査概要

地区	配布 世帯数 (戸)	配布 部数 (部)	回収部数 (部)	回収率 (%)
入田	100	200	159	79.5
上八万	50	100	70	70.0
応神	50	100	83	83.0
加茂名	50	100	76	76.0
しらさぎ台	360	360	235	65.3

3. 徳島市におけるコミュニティセンター建設の流れ

コミュニティセンターの建設では、まず住民からコミュニティセンター建設の要望が提出され決定すると、まちづくり協議会が組織化される。その後、建設委員会がまちづくり協議会に設置され、行政によって立てられた建設計画案をもとに計画が決定される。そして、工事が着工され、完成すると運営委員会によって、コミュニティセンターの管理、運営がされる。しかし、以上のような建設の流れの中に住民が施設整備や管理、

運営における協議などに直接関わったり、意見を言うような機会が特に設けられていないのが現状である。まちづくり協議会や運営委員会は各種団体の代表者、学識経験者等と限られた人達だけで構成されており、多くの地元住民が参加していないのが現状であり、また、回数についても1,2回と少ない。

4. しらさぎドームにおけるワークショップ

しらさぎ台では自治会集会所の利用グループを中心に約40名の参加者が集まって計5回のワークショップが開催された。開催は自治会が中心となり、市役所から依頼を受けたコンサルタントおよび市民グループが協力している。そして、第1回では参加者による計画づくりが、第2回では計画案提示、問題点整理が、第3回では運営イメージと運営ルールについて、第4回では運営方針と利用と備品類というように設計から運営に至るまで細かな議題が話し合われている。そして、第5回には小学生が参加して記念のコンクリート平板が作成された。

5. 調査結果

図1は施設の使いやすさに対する地区比較である。「使いやすい」と回答した人が最も多いのはしらさぎ台地区で、次いで多いのは入田地区となっている。これは、ワークショップには設計者も参加して、住民の意見を取り入れ設計していることがしらさぎ台地区の評価の高さに繋がっていると考えられる。

図2は使用規定に関する地区は比較であり、「満足」と回答した人は他の地区と比べてしらさぎ台地区が最も低く、また、「不満」を持っている人は他の地区の約4倍以上にもなる。これは、しらさぎドームは自治会による自主運営なので使用料金が他に比べ高くなっていることが理由として考えられる。

キーワード 住民参加 ワークショップ コミュニティセンター

連絡先 〒770-0814 徳島県徳島市南常三島2-1 Tel 088-656-7578 Fax088-656-7579

図3は施設による近所付き合いの増減を地区比較した結果である。しらさぎ台地区では約30%の人が増えたと答えているが、その他の地区は約40%の人が増えたと回答している。これは、しらさぎ台地区が他にはない新興住宅地であり、このような集落の特性の違いが考えられる。

図4は要望提出の場の認知度に対する地区比較である。1番認知度が高いのはしらさぎ台地区で約20%、次に入田地区で約10%であり、応神地区、上八万地区ではわずかでしかない。これは、入田地区では住民説明会を早い段階から開催していたことや、しらさぎ台地区におけるワークショップ開催の回数の多さが理由として考えられる。

図5は要望提出状況に対する地区比較である。しらさぎ台地区で約10%、入田地区でも約5%の人が提出しているが、応神地区、上八万地区では僅かでない。これについてもワークショップの効果が考えられる。

6. 結論

しらさぎドームにおけるワークショップ導入効果を他のコミュニティセンターとの比較で整理すると以下のようになる。

- ①施設利用の規定に関する評価は低い。これは、自主運営という財政的問題も関係しているので、直接ワークショップだけの問題にはできないと考えられる。
- ②地域コミュニティの影響についての評価も低いが、集落の特性も関係していると考えられる。
- ③施設の使いやすさの評価は高い。設計者の技量も関係するが、ワークショップの効果と考えられる。
- ④計画への参加の評価は高い。ワークショップを開催することによって、住民が要望を出す場、要望を出す機会がつくられた。これが、ワークショップの効果として高く評価できる。

今後はワークショップを用いた参加形態をより広域な公共施設整備へ適用する際の課題について検討していきたいと考えている。

参考文献

建築設計資料、9：コミュニティセンター、建築思潮研究所、1985年

図1 施設の使いやすさ

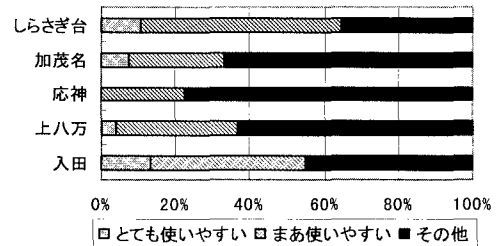


図2 施設の使用規定

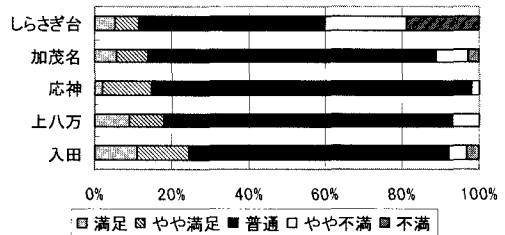


図3 施設による近所付き合いの増減

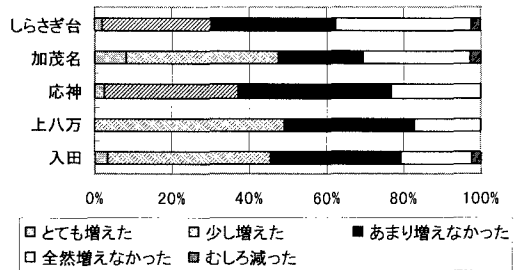


図4 要望提出の場の認知度

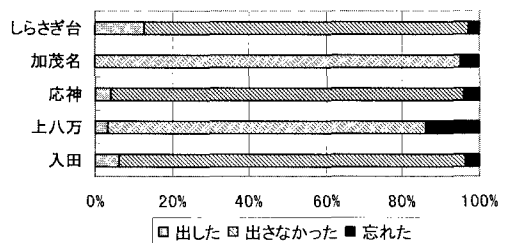


図5 要望の提出状況

